

水の文化 和紙の



表情



- 杉原吉直「和紙の今昔物語」
- 編集部「越前和紙の息使い」
- 宍倉佐敏「植物繊維としての和紙」
- 藤實久美子「近世出版事業の隆盛と和紙需要」
- 河合荘次「石碑を写す拓本の妙技」
- 毛利元信「デザインをプラスする産地の力」
- 山根一城「心を包む折形礼法」
- シリーズ里川「心優しい人たちが守るアカタンの水」
- デービッドブル「木版画を見立てる審美眼」
- 古賀邦雄 水の文化書誌「東日本 名水の旅へ」



ミツカン水の文化センター

表紙上：和紙でつくった袋に土を入れ、ろうそくを灯す。非常時に使える燈籠だ。和紙なら揉むことで光を拡散させることができるし、水で濡らせば燃えにくくなる。何より、柔らかな表情がいい。

表紙下：越前で開発された水彩画用紙MO紙を継承する、沖桂司さん。原料や材質は和紙とは違うが、オーダーメイドに対応できる手漉きの仕事で、作業工程と心遣いはほとんど和紙と一緒に。

裏表紙上：灰汁で煮溶かした原料のチリを取る女性たち。冷たい水に手を入れる根気のいる作業は、そもそもは川の上に差し渡した板の上で行なった仕事だったため「川に座る」といわれた。紙漉きを引退した年配の女性が担うことが多い。

裏表紙下：東京都台東区谷中の全生庵に建つ「山岡鉄舟居士之贊碑陰」の碑と拓本。勝海舟が碑文をつくり、字彫りは宮龜年（みやきねん）、揮毫は中林梧竹。太平洋戦争で爆撃を受けたときの痛々しい弾痕が拓本にも写されている。

